

シリーズ〈現代の作家〉

丹阿弥丹波子

—光と闇に咲く豊穡の花—

Niwako Tan-ami — Flowers bloom in light and darkness of fertility



春の花 1996年 (No.19)

丹阿弥丹波子一光と闇に咲く豊穡の花

Niwako Tan-ami

—Flowers bloom in light and darkness of fertility

2012年6月20日(水)～9月23日(日)

丹阿弥丹波子が手がける版画の多くは花や植物をモチーフにしています。どの作品からも深い静けさが漂い、その静謐さを見る者の心をも静め、瞑想的な気分へと誘います。闇の中に射しこんだ光——その光が魔術のようにものの輪郭やかたちを浮かびあがらせていきます。光が描きだす花々はモノトーンでありながら豪華に咲き誇り、季節ごとにつつろ庭の空気を想像させます。台所の一隅のざるやガラスのボールに無造作に投げ込まれた野菜には、慌しい日常生活の中に一瞬、訪れる深夜の静寂が凝縮されているかのようなのです。作者は家庭にあつてのんびりと制作に取り組む日々を送っていたわけではありません。家族の介護に追われる多忙きわまりない生活から解放され、ほっと心の安らぎを取り戻すわずかな時間に、制作に打ち込んできました。長年にわたり、自分だけに許された貴重なひと時を捧げてきた版画制作から、色彩がないにもかかわらず、華やかで芳醇なメゾチントの花束が生まれたのです。

暗い背景の中から微妙な濃淡でさまざまなモチーフが浮かびあがっています。この独特の作風は「メゾチント」と呼ばれる銅版画技法によるものです。この技法では全体に細かい＜傷＞をつけた版を使います。＜傷＞といってもベルソー（フランス語／英語ではロッカー）という道具を銅版の上で縦横斜めに入念に動かし、丹念に刻み付けた微細な溝（点の連なり）のことで。ベルソーで版面に＜傷＞をつけてゆく作業を「目立て（めたて）」と呼び、昔は職人が行ったり、現代では機械で行います。しかし丹阿弥丹波子はこの根気のいる作業も自ら行うことを常としてきました。目立てがほどこされた版は、表面に細かな凹凸ができ、ざらざらしています。このままインクをのせると、全体がインクに覆われ、拭き取ることができません。図像を描き出すには、スクレイパー（英語の動詞「スクレイプ scrape＝こすってなめらかにする」からきた言葉）やバーニッシャー（英語の動詞「バーニッシュ burnish＝金属などを磨く」からきた言葉）と呼ぶ道具で版の表面の凹凸を削りとってゆきます。磨かれた部分は平滑な面となり、その部分のインクは拭き取られ、明るい部分が生まれます。削る際に力を入れ方を微妙に調節することで、明るい白からグレートーンまで、さまざまな明暗の諧調を作り出すことができます。「メゾチント」はイタリア語で「中間調」という意味、フランス語では「マニエール・ノワール」（黒の技法）と呼んでいます。エッチングのように酸溶液による腐蝕で描画するのではなく、直接、銅版を削る直刻法の一つです。

メゾチントは17世紀のヨーロッパで始まりました。線描

を主体とするそれまでの銅版画と違い、柔らかなグラデーションが表現できるので、油彩画を版画で複製するために使われて盛んになりました。しかし19世紀になるとジョン・マーティンなど個性的な作品を残した作家がいたものの、印刷技術の発展にともない廃れていきました。近年では再び多くの版画家が実践するようになっていますが、そのきっかけを作ったのはフランスに渡って独自にこの技法と取り組んだ長谷川潔や、多色刷りメゾチントに挑戦した浜口陽三ら、日本人の版画家たちでした。丹阿弥丹波子もまた、長谷川潔の作品に出会ったことがきっかけでメゾチント作家となった版画家の一人でした。

| — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |

1927(昭和2)年、東京に生まれる。父は日本画家の丹阿弥岩吉。文化学院女学部に学ぶ。同じ文化学院の文学部にはのちに女優として活躍することになる姉の谷津子がいた。美術科進学をめざしていたが、1943(昭和18)年の学院閉鎖にともなって繰り上げ卒業となる。東京の空襲激化のため長野県下伊那郡松尾村(現・飯田市)に疎開し、デッサンなど絵の勉強を続ける。1950(昭和25)年、東京に戻り、1953(昭和28)年、油彩画で独立展初入選を果たす。1956(昭和31)年頃、長谷川潔の作品に出会い、それがきっかけで駒井哲郎に師事、銅版画を始め、1957(昭和32)年にはエッチング作品で春陽展に入選する。しかし長谷川のメゾチントに強くひかれていた丹阿弥は1960(昭和35)年頃からこの技法に取り組むようになり、以後は一途にメゾチント一筋の制作人生を歩んできた。1964(昭和39)年に春陽展研究賞を受賞、1970(昭和45)年には春陽会会員となっている。1996(平成8)年、春陽展岡鹿之助賞受賞。1971年から現在まで、日本橋の高島屋美術画廊、銀座・シロタ画廊など多くの画廊で毎年、個展を開催。また2006年より芥川喜好による読売新聞の連載エッセイに挿絵を寄稿(2012年5月、『時の余白に』としてみすず書房より単行本化)。

現在、春陽会正会員、日本美術家連盟会員

メゾチントの道具

ベルソー(左)＝フランス語でベルソー(「揺りかご」という意味)、英語ではロッカー(「揺るもの」と呼ぶ。木の持ち手を握り、下部のカーブを描く刃先を版面に垂直に押し当てて、揺らしながら動かす。先端部は薄い刃を何枚も束ねて作ってある。



バーニッシャー(中央)とスクレイパー(右)

* 技法はすべてメゾチント

* サイズはプレートマーク(=版の大きさ)

* 単位=mm(縦×横の順で表記)

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 1 花 I 1970年 365×300 | 26 くちなし 1998年 300×365 |
| 2 籠 1976年 300×365 | 27 籠(お茶の花) 1998年 365×450 |
| 3 花 1978年 365×420 | 28 草の実 1999年 450×365 |
| 4 花 1981年 300×210 | 29 籠の紫陽花 1999年 365×420 |
| 5 はまなす 1982年 285×240 | 30 庭の草花 2000年 365×260 |
| 6 実 1982年 420×365 | 31 みつば 2000年 210×365 |
| 7 花 1982年 365×300 | 32 ヒヤシンス 2000年 316×228 |
| 8 バカラ 1984年 295×205 | 33 セロリ 2000年 330×365 |
| 9 ガラスの中の枯葉 1989年 365×300 | 34 花 2002年 365×300 |
| 10 草の馬 1992年 300×365 | 35 わたの実 2002年 365×420 |
| 11 さざんか 1992年 250×365 | 36 さくら 2003年 300×365 |
| 12 秋の花 I 1992年 365×240 | 37 野の花 I 2003年 365×420 |
| 13 巢 II 1993年 450×365 | 38 こでまり 2003年 240×365 |
| 14 花(野ばら) 1993年 240×180 | 39 棚 2003年 450×365 |
| 15 花(アネモネ) 1994年 365×300 | 40 ばら 2003年 365×450 |
| 16 初冬の花 1995年 360×300 | |
| 17 白い花 1995年 365×300 | |
| 18 つめ草 1995年 240×180 | |
| 19 春の花 1996年 420×365 | |
| 20 てっせん花 1996年 300×365 | |
| 21 秋の花 II 1996年 365×240 | |
| 22 花殻 1996年 300×365 | |
| 23 風の道 I 1996年 230×365 | |
| 24 花 1997年 450×365 | |
| 25 コップの蔓花 1998年 210×365 | |



籠の紫陽花 1999年 (No.29)

うきよえたまてばこ
浮世絵玉手箱



今期の浮世絵玉手箱は「丹阿弥丹羽子 光と闇に咲く豊穡の花」にちなんで、花咲く名所を描いた浮世絵を紹介いたします。小林清親こばやしきよちかは、1876(明治 9)年から1881年にかけて『東京名所図』とうきょうめいしよずと呼ばれる風景画の連作を制作しました。それまでの浮世絵の風景画にはみられない光と影に着目した描写を特長とするこの組物には、昼の明るい日差しの中で咲き誇る花を描いた作品が含まれています。

※技法は①②いずれも木版(多色)
※寸法(紙)は大判(約 390×260 mm)

小林清親こばやしきよちか(1847<弘化 4>~1915<大正 4>)
『東京名所図』より

① 向島桜 1880(明治 13)年

江戸時代から続く桜の名所向島です。たくさんの人々が隅田川の土手を歩きながらお花見を楽しんでいます。桜の下には「はじけ豆」の看板を出した露店があります。



② 亀井戸藤 1881(明治 14)年

今も藤の名所として名高い亀戸天神社です。心字池の水面には、太鼓橋や藤の木の影が映りこんでいます。光に照らされたことで生じる影を、清親は見逃さずに描きました。



☆清親の作品は当館収蔵品によって制作された『謎解き浮世絵叢書』シリーズ(二玄社刊)の第7巻「小林清親 東京名所図」でご覧いただけます。「向島桜」が掲載されています。ミュージアムショップで好評販売中です。

版画でつながる
アートの町田

25th
Anniversary

公式ブログ<芹ヶ谷だより>更新中
美術館スタッフが発信しています。
ぜひアクセスしてみてください!

http://blog.livedoor.jp/hanga_museum/

町田市立国際版画美術館 2012年6月20日発行
〒194-0013 東京都町田市原町田 4-28-1

<http://hanga-museum.jp/>
